

透明性説の限界：欲求と価値判断

島村修平(Shuhei SHIMAMURA)

日本学術振興会特別研究員 PD・日本大学文理学部人文科学研究所研究員

私たちは、特別な事情がない限り、自分自身がいま何を信じ、何を意図し、また何を欲しているのかということを普通は知っている。しかし、私たちはそれらをただ知っているだけではない。私たちはそれらを、自身の言動という証拠に依らない直接的な仕方で知っている。その上、そのように直接的に得られる自分自身の命題的態度についての知識は、ターゲットとなる命題的態度を、基本的に、正しくかつ漏れなく捉えている、とも考えられている。これらの諸特徴は、それぞれ、「直接性」、「権威性」、「自己告知性」などと呼ばれ、自分自身の命題的態度とそれについての自己認識（通常、「自己知」と呼ばれる）の間の、他に類を見ない密接な関係を特徴づけるものとして、一定の哲学的な注目を集めてきた。両者の間のこの密接な関係が喚起する一つの自然な問いは、「私たちは、一体いかにして、自分自身の命題的態度を、関連する証拠に訴えることなしに認識しているのか。また、そのようにして得られた認識は、なぜ基本的に正しく、また取りこぼしもないと想定されるのか」というものである。本発表では、これを「自己知の問題」と呼ぶ。

自己知の問題に対しては、すでにいくつかの説明が提案されてきた。ここでは、その中でも近年注目を集めている「透明性説」と呼ばれる説明に的を絞りたい。透明性説のアイデアは、まず G.エヴァンスによって信念へ適用される形で提案され、その後 R.モランによって意図やその他の命題的態度へも適用可能な形に一般化された。発表者の見立てでは、自己知の問題に対する透明性説の説明は、少なくとも信念と意図という二つの代表的な命題的態度に話を限れば、非常に説得的である。透明性説が提案するシンプルな手続きは、私たちがいかにして自身の信念や意図を、直接的に、かつ基本的に正しく・漏れなく認識するのかを、鮮やかに説明するように思われる。

しかし、もう一つの代表的な命題的態度である欲求に関してはどうだろうか。理論的な単純性を考慮すれば、欲求の自己知もまた他の命題的態度のそれと同様の仕方で一すなわち、透明性説によって一説明されることが、もちろん望ましい。実際、前出のモランは、対象となりうる欲求に一定の制限を掛けるものの、制限されたその一群の欲求の自己知に関しては、信念や意図の場合と同パターンの透明性説による説明が可能であると考えている。だが、発表者の見るところでは、こうした考えには問題が潜んでいる。欲求の自己知を透明性説の枠組みに基づいて説明するためには、欲求と価値判断の関係についてある問題含みの前提を置かなければならず、そうした前提を置くことは、欲求の自己知が私たちの実践的熟慮の中で果たしている役割を歪め、その重要な側面を覆い隠す、という望ましくない帰結を招く。本発表の目的は、以上の論点を、一連の論証と共に、できる限り説得的な仕方で提示することにある。

この目的を果たすために、本発表は次のような構成で議論を進める。まずは、様々

な命題的態度に対して適用されうる透明性説の説明パターンを、(特定の態度に言及しない) 一般的な形式で取り出し、またその説明がうまくいくための条件を特定することを試みる。結論だけを述べておけば、それらは次のようになる。(ただし以下で、 ϕ は任意の一階の命題的態度、 p はその命題内容であるとする。)

「私は p と ϕ しているか」という自己知の問いは、ある適当な条件を満たす命題 $t(p)$ に対して、次の手続きを踏むことによって答えられる：

- ① 「私は p と ϕ しているか」という問いを、「 $t(p)$ であるか」という問いに置き換えよ。
- ② 「 $t(p)$ であるか」という問いに答えよ。

ただし、命題 $t(p)$ は次の三つの条件を満たすものとする：

- (1) 任意の p について、私は「 $t(p)$ 」と判断する準備がある \Leftrightarrow 私は p と ϕ している。
- (2) 任意の p について、「 $t(p)$ 」は「私は p と ϕ している」を含意しない。
- (3) 任意の p について、「 $t(p)$ か否か」は、外界にのみ目を向けることで答えうる。

最初の二段階の手続きは、自己知の獲得方法に関する透明性説の説明であり、後の三条件は、この説明が成功するために満たされなければならない条件に当たる。本発表では、まず、 ϕ が信念である場合に、適切に選ばれた $t(p)$ の下で以上の手続きがいかにして信念の自己知を説明するのかを概観する。その後いよいよ、私たちの主題である ϕ が欲求である場合へと目を向けることになる。

欲求の自己知に関して透明性説による説明が可能であるか否かは、ひとえに上述の(1)から(3)の条件を満たす適切な命題 $t(p)$ が見つかるか否かに掛かっている。本発表では、そうした $t(p)$ の候補として、モランが提案している「 p は望ましい」という価値命題を主たるターゲットに据えて、欲求の自己知に関する透明性説の批判的検討を行う。そこでの発表者の主たる批判点は、次の三点である。第一に、仮に(モランの言うように) 対象とする欲求をある仕方で制限したとしても、その制限された範囲の欲求に関して、(1)はそのままでは成り立たず、(1)に「主体が合理的である」という前提を加えて弱めた(1')しか成り立ちそうにないのだが、(1)をそのように弱めることには問題がある。第二に、欲求は(信念とは違い) それに対する二階の価値評価による影響を合理的に受けうることを踏まえると、じつはその(1')すら、成り立つことが疑わしくなる。第三に、「 p は望ましい」という一階の価値評価と対応する欲求との関係を反省することによっても、同様に(1')に対する疑いが導かれる。

以上の考察から私たちは、欲求の自己知は透明性説によっては適切に説明されない(欲求の自己知は透明ではない)、という結論へと導かれることになる。この結論に対して、次のように反論する人がいるかもしれない。しかし、そうは言っても、私たちが現に相当量の自分自身の欲求を、関連する証拠に依拠しないという意味で直接的に認識しているということは、あまりにも明らかではないか。こうした反論に対して、発表者には全く異論はない。ここで私たちが下すべき結論は、むしろ、自己知が直接的に獲得される仕方は決して一様ではない、というものであるように思われる。透明性は、直接的な自己知の一つのあり方を捉えているにすぎない。欲求の自己知の直接性は、透明性説とは別の、何らかの積極的な説明を必要としているのである。